



建
言
寫

3169

414
A 2002



今般税法御改正儀廟算ハ不奉窺候得
國從來ノ田租ヲ代金ニ直ニ其内

若干ヲ雜税ニ分テ其殘リヲ地價ニ課ス
凡ノ御趣意ニモ可有之歟其施設定テ善
美ヲ盡サセラルル候ハ氏租税ハ實ニ
此民ノ生命最重大ノ事件ト奉存日夜私
ニ思繹シテ聊其方法ノ宜キヲ得ルニ似
タリ然ルニ士族ニ産ヲ授ク百工ヲ勸メ

大正十一年四月
大隈侯爵郵寄贈

學校ヲ興ス等是亦方今ノ急務一日モ緩
スヘカラスシテ常ニ資本ノ乏キニ報ム
ト雖モ此機ニ投スルハ金剩スヘク穀
餘スヘク其措置甚難カラス唯此一舉其
術ヲ得ルト否トニ有リ實ニ毫釐千里ヲ
生シ候儀ト奉存函莽ヲ不顧奉建言候尤
事多端錯綜仕候間試ニ自問自答ヲ設ケ
其大略ヲ縷述スル左ノ如シ

税法改正ノ事如傳曰大損アルカ如ク大
益アルカ如ク難キカ如ク易キカ如ク之
ヲ撰フノ精粗ニアルリ
何ヲカ大損ト云フ曰私有物ヲ奪ハ、勉
強ノ念ヲ害ムシ僥倖ヲ與ヘハ、懶惰ノ情
ヲ肆ニセシ
何ヲカ大益ト云フ曰士族産ニ就クナリ
官府財ヲ運スル也地力盡スヘシ人工興

スヘシ

土貢平均スルノ一次
要件ハ更ニ論セズ

何ヲカ難シト云ヒ何ヲカ易ト云フ曰民情
ヲ失ハ、詐偽至ラサルナク日ニ千萬ノ奸
ヲ破ル氏衆寡敵セサラン民情ヲ得ハ逸以
テ勞ヲ待タン

何ヲカ私有物ヲ奪フト云ヒ何ヲカ僥倖ヲ
與フト云フ曰農民ノ念タルヤ唯ニ良田ヲ
得ルニアリ千辛万苦皆他ノ為ニ非ス而シ

其良田タルヤ必シモ産穀多ヲ云フニ非
ス産息多キノ謂ナリ沃壤ト雖モ租重キ
モノハ其價賤ク之ヲ得ル亦易シ瘠土ト
雖モ租輕キモノハ之ニ反ス産穀産息斯
ル如ク相適ハサルモノハ固ヨリ租法ノ
粗ニ因レリ然ルニ一旦改正シ土貢平均
セハ地價ノ貴賤頓ニ位ヲ變セシ地價頓
ニ變セハ貴キヲ有セシ甲家ニ於テハ苦

勞ヲ積タル私有物ヲ奪ハル、ニ非スヤ
賤キモノヲ有セシ乙家ニ於テハ不慮ノ
僥倖ヲ得ルニ非スヤ

改正ヲ非トスルカ曰大綱擧リ細目モ亦
張ランコトヲ欲シテナリ官府ヨリ一概ニ
之ヲ見レハ改正ハ愛ヲ救フナリ萬民ヨ
リ之ヲ見レハ常ヲ失フナリ其情ヲ詳カ
シニ其術ヲ悉サスニハアルヘカラス

之ニ處スルノ術如何曰試ニ甲乙二箇ノ
農民ヲ設ケテ之ヲ説カン甲乙二家各若
干ノ田ヲ有セリ甲ノ田ハ估券九十圓貢
金一圓此貢金ヲ免シ甲ノ所得ト見做シ
其原價ヲ求ムレハ一割ノ息ニシテ十圓
トナル估券九十圓ト共ニ百圓ノ地トナ
ルナリ乙ノ田ハ估券十圓貢金九圓其原
價九十圓合セテ百圓ノ地トナル如此計

算シテ全國ノ地價譬エ八十億萬圓ニシ
テ從來ノ貢金五十萬圓ナルモハ稅則ハ
地價ノ百分ノ五ト成リ甲乙二人同シク
五圓稅トナリ甲ハ四圓ノ貢ヲ増シ四十
圓ノ原價ヲ失フ乙ハ四圓ノ貢ヲ減シ四
十圓ノ原價ヲ得故ニ甲ニハ四十圓ヲ與
ヘテ四圓ノ稅ヲ増シ乙ハ四十圓ヲ納メ
サレハ四圓ノ稅ヲ減スルヲ得スト如此

スルモハ上下出八ナク甲乙損益ナシ
上文ノ如クハ租稅増減ナク甲乙損益ナ
ク數既ニ盡ルニ似タリ何ヲ以テカ士族
ニ產ヲ授クト云フ曰士祿永ク與フ可カ
ラス俄ニ奪フ可カラス故ニ祿ヲ辭シ田
ヲ得ルノ方法ヲ授クヘシ上文ニ設クル
如ク全國ノ地價十億萬圓此稅五十萬圓
即百分ノ五ト成ルヘキニ其五十萬圓ノ

内士祿二千萬圓ナラハ此分ヲ減シ残り
三千萬圓ヲ賦スルハ百分ノ三ト成ル
ナリ此率ヲ用フルハ甲八二圓ノ税ヲ
増シ乙八六圓ヲ減シ甲ノ受クヘキ原價
ハ二十圓乙ノ納ムヘキ原價ハ六十圓ナ
リ甲ノ受クヘキモ二十圓ナラハ乙ノ
出スヘキモ二十圓ニシテ上下出入ナク
ルヘキニ乙ノ納ムヘキハ六十圓ナルヲ

以テ甲乙二人ノ上ニ於テ四十圓ヲ納ノ
四圓ノ税ヲ減スヘキノ差ヲ生シ甲乙ノ
地券合セテ二百圓ナリシカニ百四十圓
トナリ四圓ノ息ヲ増ス因テ甲乙各二十
圓ノ地ヲ割キ士族ニ賣却シテ財本増減
ナシ是ハ只數理ノ有ル所ヲ審ニスルノ
ニニシテ實際上必ス如此スト云フニ非
ス

士族田ヲ得ルノ方如何曰禄ヲ金ニ直シ
四圓ノ禄ヲ還スモノニハ四十圓ヲ與ヘ
其四十圓ヲ以テ甲乙ノ田若干ヲ買フ可
シ是亦只ニ數理ヲ舉ルナリ實際上ニ至
テハ士農ノ間又一種ノ大利ヲ生ス其理
ハ下文ニ述ヘシ

財ヲ運スルノ方如何曰本邦地稅ノ重キ
雜稅ノ輕キ支那ヲ除クノ外各國比類ナ

カルヘシ故ニ直稅ハ減スヘシ間稅ハ増
スヘシ直稅ノ内亦此ヲ割キ彼ニ課スル
アルヘシ今日未開ノ產物ハ暫ク之ヲ措
キ現在新ニ課スルヲ得ヘキモノノ譬ハ證
印稅幾許分頭稅幾許何々幾許ト算計シ
其數千萬圓ナラハ上文ノ地稅三千萬圓
ノ内ヲ減シ殘リ二十萬圓ヲ以テ地稅ト
定ムル片ハ稅則百分ノ二トナリ今ノ地

租 = 比スレハ十分ノ四トナル是始テ地
税ノ適度ヲ得タリト云フ可キカ此法ヲ
施ス片ハ地租ヲ減スル三千萬圓ノ内二
千萬圓ハ士祿ヲ廢シ千萬圓ハ雜稅ヲ課
シ會計増減ナシ然ルニ共三千萬圓ノ地
租ヲ減スヘキ原價三億萬圓ノ内二億萬
圓ハ士農ノ間ニ融通シ一億萬圓ハ官府
ノ運用ニ歸スヘシ

地租減スル所ノ一分雜稅ニ變シ歳入増
減ナクシテ猶一億萬圓ヲ收ムルハ條理
ニ於テ如何曰此金ヲ收メサレハ初ニ論
スル如ク此ニ奪ヒ彼ニ與ヘサレヲ得ス
經濟上ニ於テ最忌ムヘク且民心ノ動搖
甚シカレヘシ之ヲ收メサレヲ得ス只民
ヲ富ス的實ノ運用タラシトヲ要ス
地力ヲ盡スノ理如何曰繁富ノ地ハ既ニ

地力ヲ尽シ地價モ亦貴ク一圓息ヲ得ヘ
キ田二十圓ニ至ルヘシ零落ノ地ハ地力
盡サス價亦賤ク一圓息ノ田五圓ナルヘ
シ故ニ士ノ十圓ノ禄ヲ還シ百圓ノ金ヲ
得タルモノ繁富ノ地ニ住スルハ五圓
息ノ田ヲ得零落ノ地ニ往クハ二十圓
息ノ田ヲ得ヘシ只五ト二十トノ差アル
ノニナラス人カヲ全備セル田ニ施スト

荒蕪ノ田ニ施ストハ其効ヲ焚スルモ亦
格別ナリ誰カ利ヲ捨テ不利ニ就カン必
ス荒蕪ノ地ヲ撰フヘシ如此ナルハ土
貢ノ平均ヲ得ルノニナラス人カモ亦平
均シテ速ニ富饒ノ實ヲ顯ハサン上文士
農ノ間一種ノ大利ヲ生スト云モ此理ヲ
指シタルナリ
士族ハ悉ク農タラシムル意ヲ曰就産金

ヲ救クルノ方ナリ農工商随意タルヘシ
尤全國ノ地ニテ三千萬圓ノ息ヲ増シ三
億萬圓ノ原價ヲ増ス故ニ田地得易ク過
半ハ農ニ歸センカ其詳ナルハ此ニ贅セ
ス
人エヲ興スノ理如何曰我今闕ク所ノモ
ノ萬々其中最急ニスヘキハ工藝ナリ物
産ナリ之ヲ興スニハ學校モ亦興サ、ル

可ラス合テ之ヲ三急務トシ上文一億萬
圓ヲ以テセハ甚乏シトヤサルヘキカ
全國ニ融通スル金銀概一億萬圓ナルヘ
キニ下ヨリ出ス可キモ亦一億萬圓ナラ
ハ全國ノ財ヲ盡スニアラスヤ曰一時ニ
之ヲ收ムル固ヨリ不可ナリ之ヲ西ニ集
メ東ニ散スル固ヨリ不可ナリ之ヲ出ス
ハ年賦ヲ以テシ之ヲ運スル州邑ニ於テ

スヘシ但其内綫分ヲ以テ工部省ノ資ヲ
増シ凡百ノ工ヲ興スノ師タルニ足ラシ
ムヘシ

農ノ出スハ年賦ニスヘシト雖モ士ニ與
フルニハ年賦ヲ以テスヘカラス如何曰
年賦ハ利息ナキ時ハ即金ヲ出スモノナ
カルヘシ即金ト年賦トハ必ス利息ヲ以
テ抑揚スヘシ額ニ一割ヲ加エ五ヶ年賦

ト云フカ如シ如此年賦ニスト雖モ施ス
ヘキ事業少クシテ猶餘金アラハ貸渡ス
ヘシ無用ニ貯ヘハ融通ヲ妨クヘシ
州邑ニ於テ之ヲ運用スルモノハ誰ソ曰
地方官ト州邑ノ代議人ノ協議トスヘシ
只恐ルヘキハ外國ノ教師ヲ雇ヒ器械ヲ
求ムル等一時草卒ニ出テ國力ヲ損セン
コトヲ故ニ喩ハ桑ノ苗亦茶ノ種子ヲ自在

ニ得易カラシムルカ如キ常體ノコトハ之
ニ委子得失未然ニ見定難キモノハ時々
伺ヲ經年々ノ出入ハ届出ツヘシトシテ
可ナランカ工作鑛山牧場培養或ハ水運
ヲ開キ道路ヲ通スル等ノコトヲ伺出テハ
工部省開拓使等ニ於テ注意懇切教示ス
ルノ設アルヘキカ
改正ノ難易ハ民心ヲ得ト否トニアリト其

然ラシムルモノ如何曰民ヲシテ客タラ
シメス主タラシムルノ意ヲ存スルニア
ランカ此意アリト否トハ形同クトモ情
大ニ異ナルヘシ譬ハ法ヲ施スノ初ノ朝
昔ニアル取法ノ立ツ所數ノ歸スル所間
税ヲ増スハ直税ヲ減スルユエン財ヲ集
ムルハ人民ヲ富スユエン等隱スナク欺
クナク詳ニ之ヲ示サハ智アルモノハ進

三思ナルモノハ疑ハズ相誠ノ相競ヒ速
ニ業ヲ卒クヘシ之ニ及ニ其意ヲ示サス
シテ其法ヲ施サントセハ新政日淺ク仁
政未洽カラス舊習ニ膠泥シテ必ス狐疑
ヲ抱キ澁滯甚シカラシ
士祿永ク與フヘカラス雜稅新ニ課セサ
ルヘカラス然ルニ士祿ヲ廢シ雜稅ヲ課
スルヲ以テ田租ヲ減セハ永ク與ヘ新ニ

課セサルニ同シ今ノ世ニ處スルニ今ノ
稅額ヲ以テ足レリトスル歟曰否ラス大
ニ稅ヲ増スノ策ナリ魯英佛ノ如キハ其
歲入概我六七倍ナルヘシ彼ノ如此ナル
モノハ歟稅ニ酷ナルニ非ス富民ニ巧ニ
ナルナリ我富民ノ策最急ニスヘキハ上
文ノ件々ナルヘシ若之ヲ施サレハ人
々各其能ヲ伸ヘ百工日ニ盛ニ地價年ニ

殖へ百般ノ租税不年ニシテ倍獲スヘシ
租税相倍獲スルノミナラス非常ノ大費
用アルニ方テハ全國カヲ合セテ之ヲ補
ハン從來ノ民情如此ナラサルモノハ他
ナシ士ハ素餐ニ商ハ税ヲ出サス國用ヲ
資ルハ唯田租身軀ヲ勞スルモノハ特リ
農ナレハナリ今其偏重ヲ解カハ一國ハ
一體ト成リ財政虞ナカルヘシ

問答支離セリ更ニ全局ノ成算ヲ聞カン
曰其事ニ與カラサレハ其詳ナルヲ知ル
ニ由ナシ試ニ億度ノ大概ヲ表セン

租税見積

三千九百萬圓

從來地租

是ハ米ヲ千二百萬石トシ都合千
三百萬石ヲ石三圓トナシタルモ

内

千五百萬圓

士祿引去之

是ハ士祿ヲ五百萬石トシ石代前
ニ同シ士祿與ヘス故ニ枚メス

殘

千七百六十萬圓

地券稅

此分地價ニ課スヘキ數ナリ

地價見積

三億九千萬圓

地租ヲ解ク原價

是ハ地租三千九百萬圓ヲ解ク
ハ地價ヲ増スヲ其十倍トナシタ
ルモノ

三億九千萬圓

現在地券

是ハ小作金ノ内從來ノ地租ト地
主ノ所得ハ十ト六トノ如クナラ

シト見ル片ハ地主ノ所得モ亦三
千九百萬圓ナレハ其原價ヲ十倍
トシ前ニ同シ

合
八億八千萬圓

地價

此分ニ地稅千七百六十萬圓ヲ課
スレハ地價百分ノニトナル

減租ノ原價見積

二億千四百萬圓

是ハ租ヲ減スル二千四百萬圓
ノ十倍ヲ原價トスルモノ

一億二千萬圓

是ハ士祿千五百萬圓ノ原價一億
五千萬圓ヲ引去ルヘキニ低價ノ

地ヲ撰フノ便了ルヲ以テ二割減

下スルモノハ可成ノ事ナリ

残

九千四百萬圓

餘金

此分全ク國力培養ノ財本トナル

内

二千三萬圓

官納

是ハ士祿ノ原價ノ二割ヲ削リタル

分

六千四百萬圓

是ハ地租ノ内雜税ニ轉シタル也

ケノ原價

右賤劣固陋ノ所見固ヨリ時務ヲ奉裨益

候儀有之間敷候得共大政維新ノ際ニ當

リ胸臆ニ蓄ル所默止仕候モ却テ恐多ク

奉存忌諱ヲ憚ラズ奉建言候實ニ獻弁ノ
微志御座候恐惶敬白

明治六年五月

東京府八等出仕木下助之

六十四百萬圓

